

「フジヤマ」の呼称の発生から定着に至る過程について

——富士山はなぜ「フジヤマ」と呼ばれるようになったか——

上 田 卓 爾

要約

「フジヤマ・ゲイシャ（あるいはゲイシャガール）」といえば、かつては日本の観光を代表した、そしてはや時代遅れの言葉のように思われる。ところで、ゲイシャはさておき、なぜ富士山が「フジサン」でなく「フジヤマ」なのか。いつごろから「フジヤマ」と呼ばれていたのか。本研究では「フジヤマ」の呼称の初出から定着に至る過程について内外の文献をもとに解明することを心がけた。さらに、日本における「フジヤマ」の用例についても新聞記事を用いて検証を行ってみた。

キーワード：「ロングフェロー日本滞在記」、ペリー「日本遠征記」、ハリス「日本滞在記」、オールコック「大君の都」、ケンペル「日本誌」、ヨミダス歴史館、CHRONICLING AMERICA

1. はじめに：

Fujiyama という言葉は訛か、誤りか

各国百科事典類におけるフジヤマの記述を見ると、次のようになっている。

- ① **Encyclopedia AMERICANA** (米 参考文献 1)：大項目として **FUJI**、本文中に **Fuji-yama** の記述あり。
- ② **The New Encyclopaedia Britannica** (英 参考文献 2)：大項目として **Fuji**、本文中に **Fujiyama** の記述あり。
- ③ **Collier's Encyclopedia** (加 参考文献 3)：大項目として **FUJI, MOUNT or FUJIYAMA**
- ④ **BROCK HAUS ENZYKLOPADIE** (独 参考文献 4)：大項目として **Fuji**、中項目 1) に **Fudschi** 富士市、2) として **Fujisan, Fudschisan, Fujiyama [-jama], Fudschiyama, Fuji no yama**
- ⑤ **GROTE WINKLER PRINS ENCYCLOPEDIE** (蘭 参考文献 5)：大項目に **Foedji-san, Foedji [-no-] jama, Foedji**

⑥ **LAROUSSE DICTIONNAIRE ENCYCLO-PEDIQUE** (仏 参考文献 6)：大項目に **Le FUJI-YAMA**

⑦ **ENCICLOPEDIA UNIVERSAL** (西 参考文献 7)：大項目に **FUJI-YAMA** (**Mas correctamente Fuji-no-yama**)

⑧ **ENCICLOPEDIA ZANICHELLI** (伊 参考文献 8)：大項目に **FUJI** (**Fuji Yama**)

以上の例からすると、現在の欧米諸国ではフジヤマという呼称が一般的であるといつてよいであろう。ところが、チェンバレン (**B. H. Chamberlain**) は日本事物誌 (参考文献 9) において、**the Europeanised form *Fuji-yama* is a corruption of this latter (*Fuji-no-yama*) 「ヨーロッパ語化されたフジヤマとは、フジノヤマの訛である」、としている。(*同 p 211。)** もっとも、チェンバレンが編集するようになったいわゆるマレーのハンドブック第3版 (参考文献 10) の中では、**by the poets *Fuji-no-yama*, that is 'the Mountain of Fuji,' whence the form *Fusiyama* often used by Europeans**, とのみ記しており、訛りとはしていない。(*同 p 115) また、

アーネスト・サトウ (Earnest Satow) が編集していた同ハンドブック第2版 (参考文献11) では、Mount Fuji, usually called Fuji-san by the Japanese, and Fusiyama by foreigners, と書かれ、参考に掲げられた万葉集のチェンバレンによる英訳を見る限りではすべて Fusiyama と記されており、初期の著作ではチェンバレンも Fusiyama を使用していたことが明らかになっている。(*同 p 107 高橋虫麻呂の歌か)

Japan Encyclopedia (参考文献12) でも大項目を Fuji-san とし、“Mt. Fuji” (in the West erroneously called Fujiyama) 「西洋では誤ってフジヤマと呼ばれる」と断定している。しかし、両者の主張のように、Fujiyama フジヤマが訛であったり、誤って伝えられたものだとすれば誰が、いつごろどのように伝え、なぜ訂正もされないまま定着してしまったのであろうか。

2. 明治初年から米国人に親しまれていた「フジヤマ」

「ロングフェロー日本滞在記」(参考文献13 *帯に『イザベラ・バードより前に日本奥地紀行をした青年がいた。』とある) に次のような記述がある。

「私たちは富士山の話で大喜び、だって『フジヤマ』というのは私たちが日本について唯一知っていることだし、聞き慣れない発音の難しい多くの日本語の言葉の中では親しみを覚えますもの。」(*参考文献13 215頁 妹アリスの書簡)

この記述のとおりであれば、明治5(1872)年にすでに米国人に「フジヤマ」がよく知られていたことになるが、当該箇所原文は次のようになっている。

“We were all delighted to hear about Fujiyama, as it is the only thing we knew about Japan, and the name sounds quite familiar among so many strange, unpronounceable ones.” (*参考文献14 p 168)

日本語訳では当該箇所以外に1箇所(30頁 脚注(2) Fujiyama)を除いてすべて「富士」「富士山」(ルビなし)が使用されていて、はたしてこれがすべて「フジヤマ」と書かれていたかどうか疑問であるため、原文との対比を試みた。

原文における富士山の表記は次のとおり。

①p 26 The other day I made a week's trip back into the country among the mountains to the foot of Fujiyama, the holy [mountain] of Japan. (*参考文献13

30頁)

②p 27 with the barren peak of Fujiyama to cap it all, (*同 30頁)

③p 150, 151 They had been up Fuji on the 1st, via the Otome-toge pass, Gotemba and Subashiri. (*同 188頁)

④p 152, and would have had a fine one of Fujiyama- (*同 190頁)

⑤p 152, so that one of the finest views of Fujiyama was lost to us. (*同 190頁)

⑥p 153 Felice Beato, *Subashiri* 該当箇所なし。(*同 191頁写真キャプション(写真50)「富士山麓須走り」F. ベアト撮影:筆者注、訳者は須走という地名を知らないようである)

⑦p 148 Felice Beato, *Yoshida Mt. Fuji* is barely visible in the distance (*同 191頁写真キャプション)

⑧p 154 and we were at the top of Fujiyama at 6:45. (*同 193頁)

⑨p 155 [We] put up at a sort of pilgrims' teahouse kept by a Fujiyama priest. (*同 194頁)

⑩p 155 we had beautiful views of Fuji, now almost covered with clouds and then coming out clear and distinct, (*同 195頁、「富士山」の表記2回)

⑪p 156 Met two Englishmen and the wife of one of them on their way to Fuji. (*同 196頁)

⑫p 156 You must know that every good Japanese should make a pilgrimage once in his life to the top of Fujiyama, the highest mountain in Japan and considered very holy, a god residing in the crater. (*同 197頁、「富士山の表記2回)

⑬p 157 and in three days got to the foot of Fujiyama. (*同 197頁)

⑭p 160 of Jessup, myself and boys taken on our return from Fujiyama. (*同 201頁)

⑮p 153 *The Fujiyama Pilgrims and Their party* (*同 204頁写真キャプション)

⑯p 151 *The Fujiyama Pilgrims* (*同 205頁写真キャプション)

以上を要約すると、Fujiyama が11箇所、Fuji が3箇所、Mt. Fuji が1箇所、訳語にあるが原文にないもの3箇所となっており、C. A. ロングフェローはほとんど「フジヤマ」と書いていたということが出来る。後述の翻訳書でも「大君の都」以外には原文に「フジヤマ」

と書かれた部分にルビを付すような注意を払ったものがないが、翻訳者にそこまで注文するのは過度な期待であろうか。

ところで、「ロングフェロー日本滞在記」のまえがき(*参考文献 13 6 頁、同 14 p 6)には M. C. ペリーの日本遠征に参加した 2 名(ザ・ニューヨーク・トリビューン紙特派員ベイヤード・テラーと縁戚のジョージ・プレブル)がロングフェロー家と関係があったこと、さらに身近に 1860 年に日本を訪問したリチャード・ヘンリー・デイナ二世や 1862 年に来日、1863 年まで滞在したラファエル・パンペリーもいることが記されている。また、パンペリーの著書「アメリカ・アジア横断」(Across America And Asia)が読まれていたことが妹 Edith からの書簡に記されている。(*参考文献 13 28 頁、同 14 p 26)

I want to hear more about your voyage to Japan, for you know I have just finished the great [Raphael] Pumpelly and feel quite learned in that quarter. I shall be able to understand your letters better than anyone else, I flatter myself. . . .

この点から考えれば、ロングフェロー家はその特殊な環境による日本通の一家であったと言える可能性も否定できない。しかし、ペリーの「日本遠征記」はすでに 1856 年に発行されていたし、以下に引用した著作・新聞の記述からも、この時代の米国では日本に関する知識は一般人でも入手できるものであったと見るべきであろう。

3. 米国民にフジヤマを知らしめたと 思われる文献およびそこに記述された フジヤマの表記について (原則として時系列の表記とする)

(1) ペリーの「日本遠征記」(原題“Narrative of The expedition of an American squadron to the China Seas and Japan, performed in the years 1852, 1853, and 1854, under the command of Commodore M. C. Perry, United States Navy, by order of the government of the United States.” 参考文献 16、日本語訳は参考文献 15 による)

序論で、『吾々が述べようと思ふのは、アメリカ人が日本に入り込んだ物語なのである。この物語をよりよく理解することを助け、並に、以前あった知識に何を加へたか - 若し何かを加へたとすれば - を明らかにすることを助けるために、簡単に、急いで、吾がアメリカ遠

征隊が母國の岸を離れる前に世界の人々の有してゐた資料を概観したいと思ふ。』(*参考文献 15 卷一 28~29 頁)と記し、ペリー等有していた知識を確認している。知識の出所は『主としてオランダ人によつたものである。』(*卷一 25~26 頁)そしてその知識の提供者としてケンペル (Kaempfer)、ツンベルク (Thunberg)、チツィング (Titsingh)、ゾーフ (Doeff)、フィッシャー (Fischer)、メイラン (Meyan)、シーボルト (Siebold) の名をあげ、ケンペルについては『一ヨーロッパ人がこのやうにして知り得たこと全部を、悉く記述したのであったから、彼の後輩達による記述も、吾々の有してゐる知識を増すこと極めて少かつた。』とするが、さらに『唯シーボルトだけは例外である。彼は新しい事實と材料とを集め、且つその観察と調査の結果とを、著書「日本に関する記録書」“Nippon, Archiv sur Beschreibung Von Japan”として世に公にしたのであった。』(*卷一 26 頁)と評価する。

つまり、ケンペルとシーボルトによる知識の集積が当時の日本に関する知識のすべてであったと言えることができる。同書における富士山の表記は次のとおり。

①p 7 Westward of the bay of Yeddo rises to the height of some twelve thousand feet the Fudsi Jamma, (*参考文献 15 卷一 34 頁)

②MAP of the JAPAN ISLANDS

MAP of the JAPAN ISLANDS copied from von Siebolds with slight additions & corrections, by the U. S. Japan Expedition and other authorities. (*同巻二 地図、地図上の表記は Fusi-yama となっている。)

③p 231 The Great Fusi, now, as the fog occasionally lifted, rose to view behind the head of the bay of Sagami, (*同巻二 183 頁)

④p 232 Just before letting go the anchors the weather cleared up, and the lofty cone of Fusi was more distinctly visible, (*同巻二 186 頁)

⑤p 239 The peaked summit of Fusi rose, with great distinctness, (*同巻二 202 頁)

⑥p 271 As the squadron steamed out of the bay a parting look was obtained of the lofty summit of Mount Fusi, (*同巻三 29 頁)

⑦P 326 The lofty summit of Fusi-Yama was distinctly visible as before, (*同巻三 137 頁)

以上を要約すると、Fudsi Jamma が 1 箇所、Fusi が 3 箇所、Mount Fusi が 1 箇所、Fusi-yama が 2 箇所となっており、「日本遠征記」においては大部分 Fusi

と書かれているがそれが「フシ」なのか「フジ」なのかは判然としない。

ペリー以後日本に滞在した最初の人物はタウンゼンド・ハリス（*日本滞在 1856. 8~1862. 4）である。しかし、彼の滞在記は 1930 年に刊行された（*抄録は 1896 年）ものであるため、19 世紀後半の時期に米国民にフジヤマを知らしめたとは言い難い。

(2) ハリス「日本滞在記」(原題 “The Complete Journal of TOWNSEND HARRIS first American Consul General and Minister to Japan” 参考文献 18、日本語訳は参考文献 17 による) 同書における富士山の表記は次のとおり。

- ①p 197, while “Foosie Jama”, 12,500, is bare during five months; (*参考文献 17 上巻 296 頁)
- ②p 236 and from that we could just see the top of the celebrated Fusi Yama, the highest mountain in Japan, (*同中巻 71 頁)
- ③p 416 and in a few moments I had my first view of the Mountain Fusi Yama. (*同下巻 12 頁)
- ④p 418 I have had Fusi Yama in view all day, but alas! like many other things in this world, the nearer approach does not add to its beauty or grandeur. It is now connected with a range of hills, one of which, Hakone, is some forty-five hundred feet high, which takes away the view from Yugashima has. (*同下巻 16 頁『富士山』の表記 2 回)
- ⑤p 420 Fusi Yama was quite near, (*同下巻 17 頁)
- ⑥p 421 and the cold winds that rush down the sides of Fusi Yama (*同下巻 19 頁)
- ⑦p 463 In a placwe of ashes, the brazier contained pulverized spar of a snowy whiteness neatly formed into a representation of the celebrated Fusi Yama, the top being opened like the crater of a volcano to admit the coals. (*同下巻 63 頁)

以上を要約すると、Foosie Jamma が 1 箇所、Fusi Yama が 5 箇所、Fusi Yama が 1 箇所、Fusi Yama が 5 箇所、Fusi Yama が 1 箇所、ハリスはほとんど「Fusi Yama」と書いていることがわかる。この「日本滞在記」で注意すべきは「三島は約九百戸を有している。1696 年のケンペルの記述は、その過當な潤色を適當に割引けば、そのまま現在にも當てはまるだろう。」(*参考文献 17 下巻 14 頁) という箇所、ハリス

が日本に関する参考書としてケンペルの「日本誌」を読んでいたことが明らかである。(言語は 1727 年初版の英語版の可能性が高い。なお、ケンペルの江戸参府は 1691 と 1692 の 2 度であり、1696 はハリスの誤記であろう。)

(3) The national Republican (1862. 1. 28 参考文献 19)

The new Japanese presents just sent to the President of the United States from the Tycon of Japan, から始まる新聞記事であり、a letter thanking the President for the reception of his ambassadors とあるところから、万延元年の遣米使節団に関する記事であることがわかる。贈り物が列挙されており、その中で、Blocks of crystal from the sacred Fujiyama Mountain, of diamond clearness. と書かれたものは、同記事中にこの他 an entire suit of armor や vases of antique bronze などが記されていることから村垣淡路守の「航海日記」(参考文献 20) 中に「大統領へ遣はされる品々を取揃へ、大広間にて上覧あり。かくて荷造して船に送る事どもをあつかひたり。其品々は甲冑一領・天鷲絨七巻・紋紗三十巻・紋紵三十巻・綾精好十五巻・漆器十種・陶器十種・大置物(唐銅鑄物・水晶陶器)三種・花筵五十枚」(*参考文献 20 281 頁) と書かれた水晶陶器であると推定される。

Fujiyama が sacred と形容されていることに注目したい。Fujiyama が米国の新聞に掲載されたものは後述のようにいくつかあるが、現在のところこれが最古の記事であると思われる。

(4) オールコック「大君の都」(原題は THE CAPITAL OF THE TYCOON: A NARRATIVE OF A THREE YEARS' RESIDENCE IN JAPAN 参考文献 22、日本語訳は参考文献 21 による)

外国人として初めて富士に登頂したオールコック (*在日 1859. 6~1865. 12) によるものであるが、日本語訳では上巻に 1 箇所、中巻に 21 箇所富士山が現れる。この翻訳はかなり原文に忠実で、富士山がフジヤマと記述されている部分にはほとんどすべてルビが付されている。同書における富士山の表記は次のとおり。

- ①Vol I p 178 Fusi Yama (*参考文献 21 上巻第 8 章 272 頁)
- ②p 395 CHANGE OF SCENE-A PILGRIMAGE TO FUSIYAMA, AND A VISIT TO THE SPAS OF

ATAMI (*同中巻第 20 章 146 頁)

③p 395 plan an expedition through the interior to the far-famed sacred mountain (*同中巻 146 頁、下線部を神聖な山(富士山)と訳出している)

④p 394 FUSIYAMA FROM THE SUBURBS OF YEDDO (*同中巻 147 頁挿絵キャプション)

⑤P 398 mountain vegetation of Japan; and especially Fusiyama, of which nothing absolutely was known (*同中巻 149 頁)

⑥p 399 To make a pilgrimage to Fusiyama is an act of virtue with the natives, (*同中巻 150 頁)

⑦p 402 The route to Fusiyama from Yeddo (*同中巻 154 頁)

⑧p 406 At last we were fairly on our way, and our pilgrimage to Fusiyama, '*mons excelsus et singularis*' as Koempfer describes it, '*which in beauty, perhaps, hath not its equal.*' (*同中巻 158 頁)

⑨p 406 Fusi (*同中巻 159 頁)

⑩p 407 Sakigawa is nearly as celebrated in Japanese art and story as Fusiyama (*同中巻 159 頁)

⑪p 412 It was found by Mr. Veitch in the Monastery oh *Omia*, at the foot of Fusiyama, (*同中巻 168 頁)

⑫P 419 The route to Fusiyama here turns off, (*同中巻 178 頁)

⑬p 423 VIEW OF FUSIYAMA FROM YOSHIWARA (*同中巻 181 頁 挿絵キャプション)

⑭p 421, 422 Here we remained at the foot of Fusiyama, as seen in the sketch, (*同中巻 182 頁)

⑮p 424 ASCENT OF FUSIYAMA (*同中巻 187 頁 挿絵キャプション)

⑯p 426 At our resting-place, on the top of Fusiyama, (*同中巻 189 頁)

⑰p 429 The rain that pursued us down the lower slopes of Fusiyama (*同中巻 192 頁)

⑱p 439 and the difficult of the ascent of Fusiyama (*同中巻 204 頁)

⑲Vol II CH VII p 139 continued until we approached within sight of Fusiyama (*同中巻第 29 章 420 頁 訳文 2 箇所)

⑳Vol II CH VII p 149 we obtained a first view of Fusiyama (*同中巻 432 頁 訳文 2 箇所)

以上を要約すると、Fusi が 1 箇所、Fusiyama が 18 箇所、訳語にあるが原文にないもの 3 箇所となっており、オールコックはほとんど「Fusiyama」と書いてい

たことがわかる。

(5) The Norfolk post., September 07, 1865 (参考文献 24)

日本海軍艦船名考(参考文献 23) 4 頁に軍艦「富士山」として *Fuziyama* が記載されており、元治元(1864)年製造、製造場所米国「ニューヨーク」となっているが日本側の資料では建造会社は不明であった。ところが、CHRONICLING AMERICA で *Fusiyama* を検索したところ、The steam corvette *Fusiyama*, built for the Japanese government by Westervelt & Son, sailed Monday for Yokohama とあるのを発見した。さらに Google で検索したところ、The New York Times (参考文献 25) に <http://www.nytimes.com/1865/09/05/news> および 1864/10/09 news として掲載されていることを確認した。前者は *Fusiyama*、後者は *Fuseyama* という表記であった。(*CHRONICLING AMERICA では参考文献 25 は検索結果が得られなかった。) 米国で命名され、呼称が変更されることなく、明治 22 (1889) 年に除籍になるまで富士山(フジヤマ)艦とされていたものである。

(6) パンペリー(日本滞在 1862. 2~1863. 3)「アメリカ・アジア横断」(原題 Across America And Asia: Notes of a Five Years' Journey Around the World 参考文献 26)

同書における富士山の表記は次のとおり。

①P 76 "A cone, so regular in shape as to leave no doubt of its being the Japanese volcano *Fuziyama*, was visible near the setting sun."

②p 76 "Fuziyama was very distinct, its elegant cone completely mantled with snow, and rising high into the air above the intervening wooded hills."

③P 128 "Far away over this neck, and the bay beyond, rose the lofty and graceful cone of *Fuziyama*"

④P 129 "Sir R. Alcock and the European of his party are the only foreigners who have ascended *Fuziyama*."

⑤P 129 挿絵キャプション "INOSHIMA, AND MOUNT FUSIYAMA, FROM A JAPANESE SKETCH" (*筆者注 INOSHIMA は江ノ島)

⑥P 129 "Indeed, I believe that the upper classes are generally Confucianists, while *Fuziyama* is sacred in the *Sintu* religion" (*筆者注 *Sintu* は神道)

以上を要約すると表記は⑤のみがシーボルトの地図と同じ *Fusiyama* であり、他の5箇所はすべて *Fuziyama* となっている。

1856年から1870年にかけての以上の例から、C. A. ロングフェローが来日した1871年頃は米国においては「フシヤマ」もしくは「フジヤマ」の呼称がほぼ定着していたということが推定される。(CHRONICLING AMERICA で *Fujiyama* を検索したところ、1887年12月4日および1890年11月2日の広告面に **FIRST JAPANESE M' F' G & TRADING CO.**, がニューヨーク・ブロードウェイで *toilet water Fujiyama* なるものを販売している記事が見つかった。後述の横浜写真よりはやや遅れるが、明治人の逞しさが感じられる。)

次に、ベリー・ハリス・オールコックが言及・引用しているケンペルの著作について検証を行うこととした。

4. ケンペル (日本滞在 1690. 9~1692. 5) の「日本誌」

ケンペル「日本誌」(独語版 参考文献 27、英語版 参考文献 28、日本語版 参考文献 29) 独語版はいわゆるフラクトゥール体で書かれているため、筆者には極めて読解困難であり、英語版を参考にしつつ原文にあたった。

英語版の索引(*参考文献 VolⅢ p 370)によれば、*Fuji, or Fujiyama* に該当するのは VolⅡ p 44、VolⅢ p 44 および p 55 の3箇所となっている。これを手がかりに独語版を解読して得られた富士山の表記は次のようになっている。

- ①Vol II p 251 *Fusi oder Fusi no Jamma*
- ②Vol II p 258 *Fudsi oder Fusi*
- ③Vol II p 259 *Fusji Jamma*
- ④Vol II 地図 *Fusi no Jamma Mons excelsus & singularis* 上記 3. (4) ⑧はこれを指している。

しかしながら、英語版は上記の3箇所以外にも筆者が探したものだけでも他に2箇所あり、不完全な索引と考えられるので、日本語版の索引を掲げる。

参考文献 29 の索引には富士、富士の山、富士山別にあげられているが、

- ①富士: [*Fusji, Fuji, Fusi, Fudsi*] として 137 頁 *Fusji* (富士郡)、195 頁 *Fuji*、207 頁 (訳注、富士

詣、原文表記なし)、455 頁 *Fusi*、879 頁 (訳注、富士詣 2 回、原文表記なし)、891 頁 *Fudsi, Fusi*、892 頁 (富士 3 回、原文表記なし)、893 頁 (原文表記なし)、958 頁 (原文表記なし)

- ②富士の山: [*Fusino Jamma*] として 895 頁 *Fusino Jamma*

[*Fiji no Jamma, Fusi no Jamma*] として 877 頁 *Fuji no Jamma*、952 頁 *Fusi no Jamma*

- ③富士山: [*Fiji Jamma*] として 195 頁 (原文表記なし)、207 頁 (原文表記なし)、860 頁 *Fuji Jamma*、879 頁 (原文表記なし)、891 頁 (原文表記なし)、892 頁 (6 回、原文表記なし) となっている。なお、索引にはないが 886 頁の地図上には *Fusi no Jamma Mons excelsus & singularis* と記入されている。

以上の知見を整理すると、富士山を『フジヤマ』として世界に紹介したのはケンペルが最初であり、その「日本誌」を参考にしたベリー、ハリス、オールコックらがシーボルトの地図の記述と同様に「フシヤマ」を主として用い、米国の新聞では不統一ながら「フジヤマ」「フシヤマ」と表記され、時代が下がるにつれてパンペリーや C. A. ロングフェローのように「フジヤマ」と表記することが定着するようになったものと推定される。あくまでも米国の資料を主にした推論であるが、こうした 18 世紀から 19 世紀にかけての欧米諸国への伝播の状況から判断すると、「フジヤマ」があながち訛りであるとか、誤用であるとは言い切れないものがある。

5. 日本における「フジヤマ」の用例について

昭和 23 (1948) 年 8 月の読賣新聞は社説で『またいままでのわが国の観光政策は明媚なる風光、特異なわが国固有の文化、遺蹟等を外国人に誇示し、フジヤマとゲイシャガールを押しつけることをもって能事終れりとしていたと言えるのであるが、今後はかかる態度はゆるされない。』(参考文献 30) としているのであるが、第二次世界大戦以前はそれほどフジヤマ(とゲイシャガール)を日本観光の代名詞のようにしていたのであろうか。

ヨミダス歴史館を検索すると、意外なことに読賣新聞における最古の例は、昭和 5 (1930) 年 6 月 9 日夕刊 2 面で、『フジヤマに憧れ米國から觀光』という記事であることがわかる(参考文献 31)。さらに 1945 年 8 月 15 日までには 8 例、なおかつ、「フジヤマ」単独で使用さ

れているのは6例、うち2例はFUJIからHUZIへのローマ字表記に関するもので、観光に関係ある記事は僅かに4例で、他の例は昭和6(1931)年5月21日『ヒマラヤよりもとフジヤマ禮讚』、昭和10(1935)年9月23日『お嬢さん雨の怨み』、昭和15(1940)年3月12日『パリの子供が見た日本』となっているに過ぎないのである。

つまり、観光客を含めた外国人が富士山について言及するときに意識して「フジヤマ」と表現しているように思われるのであるが、それでは、これ以前に日本では「フジヤマ」が用いられたことはなかったのか。

①米国製の富士山(フジヤマ)艦が明治22年まで海軍に所属していたことは上記3.(5)ですでに述べた。

②明治10年代半ばからモノクロ写真に日本の絵師が着色し、蒔絵の表紙をつけたアルバムが土産物として売られ、あるいは輸出されていた。これがいわゆる「横浜写真」であり、富士山の表記は大部分「FUJIYAMA」になっている(*参考文献32 108, 109頁)。

明治時代の外国人向け出版物としては、

③いわゆるマレーのハンドブック(参考文献10)も上記1.で述べたようにFuji, Fuji-sanをまず記述し、*Fusiyama often used by Europeans*とする。

④喜賓会のMAP OF JAPAN FOR TOURISTS(参考文献33)があるが、表表紙に富士山、裏表紙には和服の日本女性(*芸者とは思われない)が描かれており、地図上にはFUJIと記されている。

⑤日本郵船が豪州からの観光客向けに作成したTO NIPPON, THE LAND OF THE RISING SUN(参考文献34)にはFujiとFujiyamaが1回ずつ記されている。

⑥Useful Notes and Itineraries FOR TRAVELLING OF JAPAN(参考文献35)も喜賓会の出版物であるが、地図中にFUJISAN、序論にFuji-yama(pXX)、本文中にFuji(p8)、写真キャプションにはMount Fuji(p9)とまったく統一されずに記されている。

⑦喜賓会を継承した形のジャパン・ツーリスト・ビューローは徽章の上半分が富士山そのものであり、雑誌ツーリストにも富士登山などの英文寄稿が数多く掲載されている。しかし、Fujiyama, Mt. Fuji, Fujiと表現はまちまちである。

⑧大正時代の外国人向け出版物のひとつである横浜のトーマス・クックが出版したガイドブック、Information for Travellers Landing in Japan(参考文献36)にはMOUNT FUJIが2回、Mt. Fujiが1回、Fujiyama

が2回記されている。

つまり、①・②を除けば積極的にフジヤマを用いた訳ではないが、さりとして否定的ではなかったように思われる。ところが、昭和時代になってからは、

⑨昭和9(1934)年から国際観光局・国際観光協会の出版したツーリスト・ライブラリー(英語版 参考文献37)は第5巻で広重の描いた富士をMount Fujiとし、第24巻では北斎の富岳三十六景をThe thirty-six views of Mount Huzi(第24巻発行は1938年であり、ローマ字表記が変更になっている)としており、FujiyamaでもFujisanでもない。また、The LURE of JAPAN(参考文献38)もMt. Fujiと表記している。とすると、「フジヤマとゲイシャガールを押し付けた」と戦前の観光政策を批判している昭和23(1948)年8月の讀賣新聞の社説は正しいと言えるであろうか。旧体制をすべて否定しようとする、いかにも日本的な発想から書かれたものではないだろうか。余談であるが、いわゆる『フジヤマのトビウオ』は昭和24(1949)年の流行語であった。

6. まとめと今後の課題：

「富士山」は英語圏、ドイツ語圏、ラテン語圏の百科事典では大部分が「フジヤマ」として扱われており、その原点はケンペルの「日本誌」にあるということができる。今回は英語版の不完全な索引のため、原文表記を4箇所しか探し出せなかったが、さらに研究を続けて、より完全な原文表記を集めることとしたい。何故に原文表記にこだわるかといえば、日本語を含めた翻訳は読みやすさの点では有用ではあるがあくまでも二次資料として扱うべきものであると考えるからである。

さらに戦前の日本における「フジヤマ」の用例は極めて少なく、限られた条件下でしか使用されていないことも判明した。研究を進めていくうえで、当時の観光行政が「フジヤマ・ゲイシャガールを押し付け」たものではなかったことを証明するいくつかの資料も入手済みではあるが、今回は割愛せざるを得なかった。稿を改めて発表することとしたい。

参考文献

1. Encyclopedia AMERICANA, Scholastic Library Publishing Inc., 2005
2. The New Encyclopaedia Britannica, Encyclopaedia Britannica Inc., 2007

3. Collier's Encyclopedia, Collier's 1995
4. BROCK HAUS ENZYKLOPADIE Brockhaus 2006
5. GROTE WINKLER PRINS ENCYCLOPEDIE 1980
6. LAROUSSE DICTIONNAIRE ENCYCLOPEDIQUE LAROUSSE 2005
7. ENCICLOPEDIA UNIVERSAL 1961
8. ENCICLOPEDIA ZANICHELLI 2005
9. THINGS JAPANESE 第6版改訂版 1939
10. HANDBOOK FOR TRAVELLERS IN JAPAN 第3版 1891
11. A Handbook for travelers in central & northern Japan 第2版 1884
12. Japan Encyclopedia LOUIS FREDERIC 2002
13. ロングフェロー日本滞在記 チャールズ・A・ロングフェロー著 山田久美子 訳 2004 平凡社
14. CHARLES APPLETON LONGFELLOW TWENTY MONTHS IN JAPAN, 1871-1873 Edited by Christine Wallace Laidlaw 1998 Friends of the Longfellow
15. ベルリ提督『日本遠征記』土屋喬雄・玉城肇 訳 岩波文庫 全4冊昭和23年1刷(昭和49年6刷)
16. Narrative of The expedition of an American squadron to the China Seas and Japan, performed in the years 1852, 1853, and 1854, under the command of Commodore M. C. Perry, United States Navy, by order of the government of the United States. Francis L. Hawks 1856 米国上院版 3冊本 国会図書館蔵
17. ハリス「日本滞在記」上中下 坂田精一 訳 岩波文庫 1973 5刷
18. "The Complete Journal of TOWNSEND HARRIS first American Consul General and Minister to Japan" 序文と注 M. E. Cosenza 1930
19. The national Republican., January 28, 1862, Image 2: Library of Congress, CHRONICLING AMERICA 所収
20. 村垣淡路守「航海日記」時事新書 1959
21. 「大君の都」上中下 山口光朔訳 岩波文庫 1965 4刷
22. THE CAPITAL OF THE TYCOON: A NARRATIVE OF A THREE YEARS' RESIDENCE IN JAPAN BY SIR RUTHERFORD ALCOCK, LONDON: LONGMAN, GREEN 1863
23. 日本海軍艦船名考 浅井将秀 編 東京水交社 1928
24. The Norfolk post., September 07, 1865, Image 2: Library of Congress, CHRONICLING AMERICA 所収
25. <http://www.nytimes.com/1865/09/05news> および 1864/10/09 news
26. "ACROSS AMERICA AND ASIA NOTES OF A FIVE YEARS' JOURNEY AROUND THE WORLD AND OF RESIDENCE IN ARIZONA, JAPAN AND CHINA" Raphael Pumpelly NEW YORK LEYPOLDT & HOLT 1870
27. Geschichte und Beschreibung von Japan, Engelbalt Kampfers, Springer, 1980
28. The History of Japan Together with a Description of the Kingdom of Siam 1690-92, ENGELBERT KAEMOFER, translated by J. G. SCHEUCHER, AMS Press, 1971
29. [新版]改訂・増補 日本誌 ケンペル著 今井正編訳 霞ヶ関出版 2001
30. 讀賣新聞 1948. 8. 4 ヨミダス歴史館
31. 讀賣新聞 1930. 6. 9 ヨミダス歴史館
32. 明治の日本《横浜写真》の世界 横浜開港資料館編 有隣堂 1990
33. MAP OF JAPAN FOR TOURISTS 喜賓会 1897
34. TO NIPPON, THE LAND OF THE RISING SUN Wilson Le Couteur 著 1899
35. Useful Notes and Itineraries FOR TRAVELLING in JAPAN 喜賓会 1910 8版増訂(初版1905)
36. Information for Travellers Landing in Japan Thos. Cook & Son Yokohama 1914
37. TOURIST LIBRARY 1~40 国際観光協会 1934~1942
38. The LURE of JAPAN 秋元俊吉著 国際観光協会 1934